

朝 浩之（編集担当者）

670頁を超える大著をどのように読むか。その手がかりを求めて巻末の初出一覧を見ると、冒頭の「朝河貫一語録」、それに続く「序章 日本史における天皇制」、そして「第3章 ジェフリー・P・マスの二重政体論が見落としたもの」を除く章は、著者が2005年から2019年までの間に公刊した著書、諸論文、訳書・編訳書を再構成して編まれた論文集であることがわかる。ではなぜ今、刊行されたのか。

著者の執筆活動を多少なりとも知る読者にとって現代中国の研究者である著者がなにゆえに門外の日本史分野に切り込んだのかという点に関心が向くであろう。

著者は本書名の副題の一部になっている「朝河貫一」と出会い、朝河史学はなぜ日本では無視されてきたのか！と大いなる疑問をもち、朝河貫一から学ぶ道に進む。驚くべきは、朝河理解のスタートを彼の英文原書の翻訳・編訳から着手したことである。本書第1章は朝河の論著『大化改新』（2006年、334頁）、第2章は同じく『入来文書』（2005年、720頁）、『朝河貫一比較封建制論集』（2007年、527頁）、『中世日本の土地と社会』（2015年、255頁）、第5章は『明治小史』（2019年、142頁）を取り上げる。これら自らが邦訳した朝河の英文論著を解説する章が本書の骨格をなす。その間、『朝河貫一とその時代』（2007年）、『日本の発見——朝河貫一と歴史学』（2008年）の2書も刊行されている。

10年以上にわたって朝河の訳書を発刊し続けた著者の注力は驚異的だが、かといって現代中国研究者としての著作に断絶が生じたわけではない。三つの訳・編訳書を刊行した3年後の『客家と中国革命』（2010年）から始まって最新刊の『〈中国の時代〉の越え方——一九六〇年の世界革命から二〇二〇年の米中衝突へ』（2020年）まで、単著だけでも12点を数える書が刊行されている。

思うに本書を編んだ著者の問題意識において、門内の「中国」と門外の「日本史／朝河史学」は不即不離、不可分のものとしてあるようだ。この著者の境地に読者を引きずり込まんばかりの刺激的な言説が全篇にあふれている。

「朝河貫一語録」は朝河史学の精髓の集合といってよいが、まずはひたすら虚心に読むのがよい。さすれば本書読了後に再読すると目から鱗という箇所が多数あるはずだ。

序章では短いながら著者の本書に込められた意図が述べられている。

「第1章『大化改新』は天皇による革命である」「第2章 日本史の封建制は源頼朝に始まる」

「第5章 明治維新を経て、武士道は国民の道徳に成長した」——この3章は朝河の論著を解説するものであり、内容は必ず章題名に表現されている。第1章では朝河と津田左右吉の論著から多くを引用し、津田の「大化改新」論を完膚なきまで批判するが、こうした日本史学に関する論著の引用は随所に見られる。過剰にも思える引用の多さは、朝河史学を無視し続けてきた日本史学の文献渉猟の成果であろうが、日本史に疎い読者に朝河史学の真髄を伝えることに大いに効果を発揮している。

第3章では米国の日本史学者マスに焦点を当てつつ、日欧封建制の比較研究を基底にする朝河の日本封建制論を解説する。第4章では幕末に浦賀沖へ来航したペリーが江戸幕府に降伏を促すため白旗を差し渡したか否かをめぐる戦後日本における論争について、白旗授受を事実とし、これを対米従属の原点と断じる。

第6章は「沖繩」、第7章は「日中関係」について論じられる。この2章は直接的に朝河に言及することはない。朝河史学の応用編として、現在の日本が直面する問題について朝河に代わって著者が解析しているといってもよいだろう。

補章も直接的には朝河に言及することはない。笠井新也の四つの論考を引いて、未だ完全とは決着のつかない邪馬台国論に対し、著者は旗幟鮮明に、邪馬台国九州説を「白鳥庫吉帝国主義史観」として真っ向から否定する。

「あとがき」からとられた帯の惹句には「本書に対して、『朝河史学の誤読』とか、「朝河史学の曲解」という批判が登場するならば、それは私の本懐である。誤読ならざる読解、曲解ならざる理解への第一歩だから」とある。朝河貫一論、朝河史観を集大成した本書に対する日本史研究者から論評を期待するのは著者だけではなく、読者も同様ではなかろうか。